

G— 8 わが国における被服教育発展の様相(第1報)  
——明治期における裁縫教授法の発展——

文化女短大 樋口 哲子

1. 明治5年、近代学校制度の実施により学校教育にとり入れられた裁縫教育は、初期においては、素朴な個別教授であった。爾来今日まで、被服教育における教授法発展の過程は、時代的背景の影響、特に教育思潮の影響を受けとめつつ独自の教授法を体系づけてきた先人の遺産にささえられている。

おもな著者の教授法の書物から、裁縫教授法発展過程の特徴をとらえることにより、各期において消長をみた教授法の原則と問題点を明らかにし、教授法研究に資することを目的とした。

2. 明治期における主な著者の裁縫教授法の書物を中心資料とし、教授法の上で大きな発展をみせ、特徴の顕著な30年以後のものと、それ以前との二期にわけ、発展の様相を整理した。

3. 第一期は、素朴な個別教授から一斉教授への工夫案出の時期であり、先覚者渡辺辰五郎、朴沢三代治の功績は大きい。掛図、雛形製作、部分縫などの工夫がなされ、教授法に新生面が開かれた。

第二期は、一斉教授が全国に普及浸透していった時期であり、ヘルバルト教育思潮の影響を受け、裁縫教授法が教育の原理と密着しながら理論化、体系化の方向をたどる。段階教授、教授案、施設・設備、教鞭物など多面的に研究がなされた。